



左隻



右隻



左隻裏面部分

7 糸桜図屏風 狩野常信 六曲一双
 紙本金地着色 江戸時代(十七~十八世紀)
 各本紙二三・〇×三三・四〇・四

屏風の中央に簾を嵌め込んだ御簾屏風で、簾部分も含めて表裏両面を金地とし、表裏同じ位置に同様の桜樹が描かれる。屏風を左右に配置して並べると、表裏とも中央に流水が表現され、流水の両側に数本の枝垂れ桜が咲き競う。桜樹の合間には、笹竹や蒲公英、躑躅を配し、のどかな春の光景が展開されている。胡粉をやや盛り上げて丹念に描いた桜花、樹木の幹肌の細かな表現が、常信の穏やかな画風によって、やんわりとした美しさを醸し出している。探幽の作品と比較した場合、探幽は比較的あっさりとした、常信は丹念さが感じられ、常信の描写表現の良さは、こうした点に認められると言える。

常信は、狩野探幽の弟で木挽町狩野家の基礎を築いた尚信(一六〇七~五〇)の長男。承応、寛文、延宝の各内裏造営に参加して活躍した。探幽の活躍の影になりがちであるが、「常信縮図」等からは、探幽と同様、古典の学習を良く行い、写生等も怠らなかつた人であることが窺える。様々な画題の作品に取り組んだことが遺品から知られ、本屏風が京都御所の調度の品として伝来したことからも、彼の画技は評価を得て、多くの御用をこなしていたと見られる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花鳥―愛でる心、彩る技（若冲を中心に）

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 40

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年三月二十五日発行

©2006, The Museum of the Imperial Collections